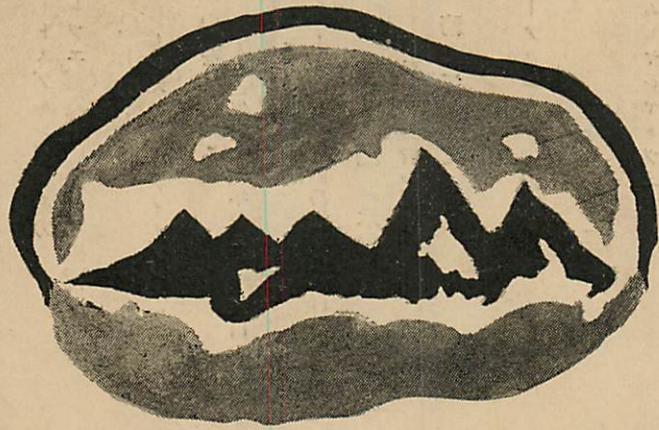


大正十二年七月廿七日第三種郵便物認可  
昭和二年六月二十八日印刷納本

昭和二年七月一日發行  
(每月一回  
一日發行)

# 山とスキー



第七十三號

札幌 山とスキーの會 發行

◇すまりをて得を讀愛御の下殿宮父秩りよ號刊創は誌本◇

次目號三十七第

記事

グライトスブルングとその  
シャントエ築造上に及ぼす影響に就て

Dr. Strumann 原著  
小林辰雄杉山又雄譯 (一)

登山史上の人々

—レスリー・ステイブレン小傳—

大島亮吉 (五)

手稻山を眺める

—大正年間十五年のスキー想出の一端—

岡村生 (一八)

川名のアイヌ語解

—特に北海道山岳地方に於ける—

山口生 (二一)

藏王日記 (承前)

—三枝茂雄君の死—

額木田次郎 (二四)

會務に就て

雜報

小川玄一 (三〇)

スキーテクニクの研究

廣田戸七郎 (三一)

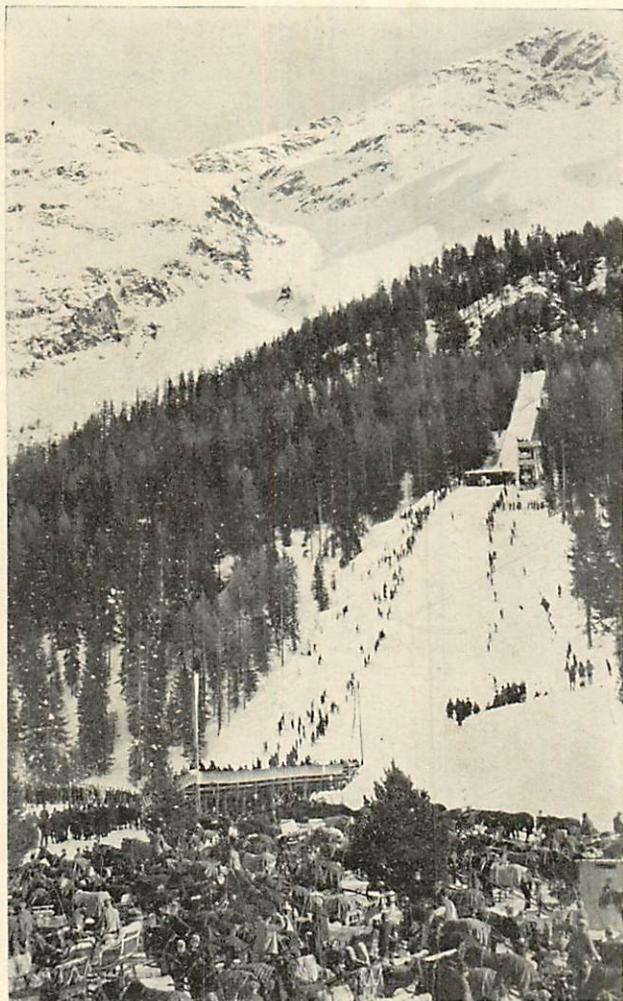
寫眞版

オリムピヤシャントエ

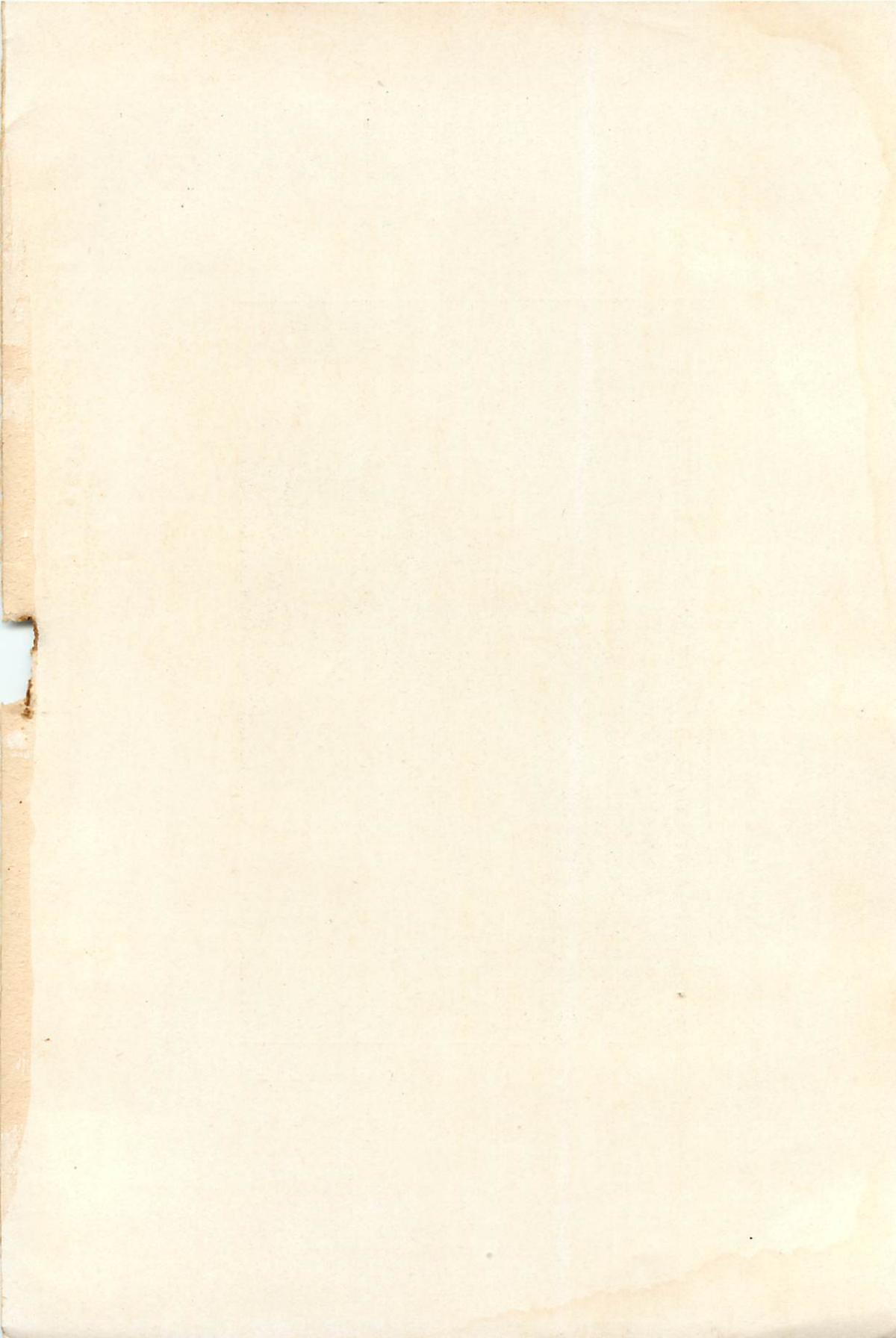
トムラウシ山よりオプタテシケ山脈を望む

山口健兒

昭和二年七月發行



オリンピックヤンツエ



# グライトスプルングとそのシャンツエ 築造上に及ぼす影響とについて

von Straumann, Waldenburg (Schweiz)

小林辰雄、杉山又雄譯

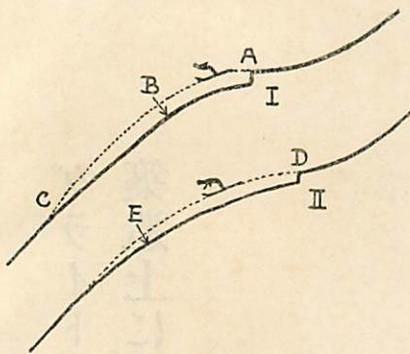
余はスイススキークラブ年報に「スキー遠距離飛躍と其力學に就て」書いた（本誌六十九號參照）

航空力學的ジャンプ（タムス・スタイル）はフルーグバーン（Engstlin 飛行曲線）の水平距離が出來得る限り長かつた時にのみ、即ちシャンツエがティフスブルングよりもむしろワイトスブルングの目的にかなふ様に造られたシャンツエである時にのみ完成せられるものであると云ふ事を。

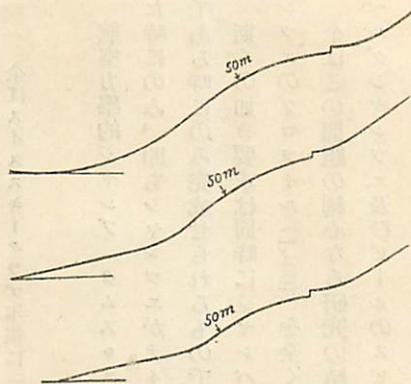
斯くの如き要求は同時にジャンパーに對する危険瞬間を出來る丈け減少しなければならぬと云ふ條件と相まつて、シャンツエのプロフィール（Profil）を全く新しい種類のものに制限したのである。

余はこの問題の細心なる研究の結果、今日、サン、モリツツのオリンピヤシャンツエ、ランゲルブルツクのエルツエンベルグシャンツエ及びビールのスピツツベルグシャンツエで實證した様なプロフィールが善い事を知つた。

この最近に稱へられた二つのシャンツエの如く理想のプロフィールは持ち合せる地形を容易に變へて得られるものでなけ



〔Tiefsprungschanze(I)と  
Weitsprungschanze(II)の比較〕



上 Weitsprung = Ideal = profil 中 Erzenbergschanze  
下 Spitzbergschanze

ればならぬ。で最近サンモリッツに作られたものは、持ち合せる地形は良くはないが容易に改良し得て、最良のプロファイルを示して居る。

若しこゝに今日まで一般にあつた Tiefsprung シャンツエ(I)のプロファイルと最新式の Weitsprung シャンツエ(II)のそれとを比較するならば、ティフスブルンクプロファイルでは單に短いA—Bの部分が航空力學的に利用されて居るに過ぎぬ事を容易に見得るであらう。

B 點からの下降は空氣に對する身体の角度が大に過ぎて單に落下傘の効果をなすにすぎぬ。之に反してワイトスブルンクプロファイルでは非常に長いD—Eの間が航空力學的に働いて居て、ジャンプの距離を長くする助けをして居る。

こゝに讀者諸君に參考として理想のプロファイル及びスピッツベルグシャンツエのプロファイル及びエルツエンベルグシャンツエのプロファイルについて簡單に書いて見やう。サンモリッツに於けるオリンピックアシャンツエに關する詳しい記載はスイススキークラブのジャンプ大會後に出版される筈である。オリンピックアシャンツエはその大會に用ひられる事になつて居るから。

プロファイルの研究には次の様な條件を注意しなければならぬ。

1. プロファイルは今日タムスタイルを正しく適用して達し得られるジャンプ距離即ち六十米乃至八十米を認容しなければならぬ。

2. プロファイルはジャンパーの危険な瞬間をミニムム (Minimum) にするも

のでなければならぬ。

3. プロフィールは順應性のものでなければならぬ。即それは現在の關係に適して居て而も將來移轉する事なしに更に大きなジャンツエを完成し得るものゝ前拵へであらねばならぬ。

この主なる三つの條件の外に更に今一つ考慮に入れなければならぬものがある。それは大ジャンプに比例して増すランデングのショックを減する事である。

第一條件。ジャンプ距離が長くなるからランデングバーンは九十米―百米必要である。このランデングバーンは出来る丈け危険のない様に作らねばならない。オリンピックアジャンツエではそれ故に最大傾斜の部分を出来る丈け短かくしてある。

この最大傾斜は約三十六度でジャンツエから六十米―八十米の位にある。即ち最長のジャンプのランデングの所にある。傾斜角は次第に増す様にする。故にランデングバーンの上半部は非常に傾斜の少なくなるものである。故に弱い傾きの部分の上ではショックも小であるし轉倒の際も危険がない。

で四十米位の部分の上からジャンツエのプロフィールを強く彎曲せしめる。強く彎曲したプロフィールはその上を早い速度で這つて居るジャンパーに約四十一―五十呎位の遠心力を與へるものである。この力でランデングのショックを減するのである。又同時に平らなバーンの上でジャンプも出来る丈け危険がなくなるのである。

遠心力加速度を應用してランデングのショックを減少する新方法は最初にランゲンブルツクのエルツエンベルグジャンツエに應用せられて成功をおさめて居る。

近頃新らしく作られたスピツベルグジャンツエでも亦特に確められた。かゝる成功がオリンピックアジャンツエでは得られないと云ふ理由はない。水平に續いて居る無限のアウトランと急傾斜との交點 (Ubergang) は大きな半径の圓弧によらねばならぬ。

Ubergang の弱い圓弧は急傾斜の斜面の下の限界までのジャンプを許すものである。アプローチは出發點の弱い斜傾に

續いて天然のスロープに人工を加へて作らねばならぬが今日では未だ完成せられて居ない。

それは約百米位で三十度―三十五度の傾斜を持つて居る。このシャンツエの移り行きは、なめらかで均勢の取れたものでなければならぬ。シャンツエの端の正しい位置はアブローチによるもので、實驗的に確定されなければならぬ。

アブローチは平均巾八米、シャンツエは十二米、ランデングバーンとアウトランは四十米の巾を有するものである。

ランゲンブルツクのエルツエンベルグシャンツエはオリンピアシャンツエと同じく斯る原理のもとに作られた。唯こゝでは地形によつてシャンツエが前に傾き過ぎて居る。

プロフィルの性質はオリンピアシャンツエの如くでなければならぬ。ビールのスピッツベルグシャンツエは困難な事業である。これはその素質上少なくとも五十米のジャンプが可能である。而しこれに續いて居るスロープは僅かに平均廿二度の傾斜に過ぎぬ。それで初めは斯くの如き平らなスロープで上記のジャンプは不可能の如く思はれた。

スピッツベルグシャンツエでは五十米のジャンプに對する水準差はティフスブルグシャンツエの同じジャンプ距離に對する高低差の約二分の一を一寸越すに過ぎない。

余のフルーグバーン表によれば二十二度のスロープで五十米飛び得る。唯ランデングバーンの正しい興味でシヨックを減する遠心力を利用せねばならない丈けの事である。新雪の時の試験的ジャンプではアブローチを全部用ひないで四十米飛び得た。唯單に二十度―二十五度の傾斜で二十米―三十米のジャンプは立ち得るのである。

時に是非とも必要なサツツの端を少々移動せしめるのが容易である様に、シャンツエは出来る丈け後に引つ込められた。その端は實驗により一乃至二米前に出されたが而し再びこれは豫期の如くこはされた。そこで吾々のジャンパーはタムス式の長所を得つゝある。

スピッツベルグシャンツエの試験事業は自分の長距離ジャンプ理論とそれから導かれるシャンツエ築造規則の正當な事を示して居るものである。(未完)

## 登山史上の人々 (四)

大 島 亮 吉

——レスリー・ステイブレン小傳——

純然たる登山者としてステイブレンの経歴は勿論上述の如く、又先に示せる『黄金時代』の登山表の一瞥に依つても之れを知るを得るも、尙ほ登山者としての彼れの名譽と彼れに對する後來の者の感恩の最も大いに主張し得るものは實に此の『ブレイグラウンド』の一著に他ならぬと言ふ事は等しく登山界での評者の是認する所である。とは言へ、偶々登山者として以外彼れの優れたる文才が其れと結合されたと言ふのみで、決して彼れはアルプスの山岳風光を描がんが爲めの登山を爲したのでは無かつた。即ち彼れは立派な登山者であつたと同時に、又優れたる文人であつたのである。其故彼れは眞の登山本能 (Mountaineering Instinct) とも言ひつ可きものを所有して居た。例へば常に彼れはウエンゲン・アルプの陰影が彼れに暗示する彼の未だ何人にも越えられし事の無い山稜の二ヶ所の凹部や巨大な岩と氷の山壁を望んで、其れに依つて其處を登り越して見たいと言ふ事に甚だしく刺激され、斯くて終いにユンクフラウヨツホとアイガーヨツホをば最初に越えて、彼れの "The Jungfrau" 並びに "The Eiger" の二章に其れ等を叙して、其の凹部の名を不朽のものと成したのであつた。然して他にステイブレンのものせし散文には多少一般向きの題材のものが多く、彼れは一種の登山の宣傳を爲せしと言ふ後代の一部登山者の爲せし非難非謗に對しては、亦た他に之れを止むを得ざるものとして許容す可き點があると言はれて居る。即ち其れに就て少しく觀するならば、先づ此の『黄金時代』と其れ以後の一八八〇年代、九

○年代との間に於けるアルプス登山に關する文献の背景差と云ふものに吾等は留意し無くてはならない。

凡そアルプスに關する文献は其れ自体に於て既に未だ嘗て一度も山岳を登攀せし事無き者に採りても、將た亦未だ嘗て一の山岳をだに遙望せし事無き者に採りてさえ、愉しきものであつた。而して其の登山の歴史は殊に興味深いものである而して登山史の初期の（即ち『黄金時代』以前の）多くの著書の包有する魅力は、主として其れ等の著者たる所謂バイオニヤ達が有せし山頂征服に對する熾烈なる熱情である。而して其れ等の熱情は總べての登山に一般共通的な廣汎な事象と共に書き織られてあるのである。其の當時に於ては此の登山と云ふものは其れがスポーツとして成立するか否かの一の試練の時期に際會して居るのだと云ふ事は勿論其れ等の著者等は好く知悉して居たし、又同時に彼れ等は彼れ等に對しての一種の歸依者を得んと最も熱心に努力して居たのだつた。其故彼れ等は多少宣傳の意味で稍々通俗的にして一般的興味をも惹くが如き題材のものを叙し、又語調も其れに伴ふが如きものであつた。然るに其後登山の隆盛と爲るに到つては斯る必要は全然消失し行く可きものと思はれなければならぬ。而して最早其の時に於ては登山の文献は一般世衆を對象とせず同じ登山者同志の爲めに主として書かる可き性質のものとして爲りて、嘗て登山の歴史を一般には愉快に讀まる可きものとしたバイオニヤの熱情、其の辛勞、或ひは一般の登山の場合に於ける黎明星光を戴きての早發、風強き黎明、山頂到達の勝利と敗北等の事項を記述せんとする要を見なく爲つて仕舞つた。そして例へば今日の文献は唯だ經驗ある登山者のみに興味がある特殊な登山術の詳細な、微に入り細を穿つ的の記述や門外漢には全然了解し得ぬが如き奇妙なる混合語を以つて記される事に爲つた。斯くて其の以前の文献の有せし彼の魅力は失せ行きつゝあるのである。ステイブンの著作が前者の最も顯著なものゝ代表である事は言ふ迄もない。然して以上の各時代の其の背景差の説明に依つてステイブンの著はより高く意義あり、價値附けられるものなのである。科學及びスポーツに於ては特殊な二つの傾向が其の文獻上に現はれるものである。即ち其の一は一般的な記述を試みる者に對して其れを嘲笑する傾向にして、他の一は一般人に讀まる可き性質の文献を生ぜざる可からざると云ふ傾向である。ステイブンの『プレイグラウンド』の生ぜし所以と彼れの後代

に蒙りし其の非難誹謗は正しく此の特異なる二傾向の實際的に具現せしものに他ならぬ。

然し乍ら以上は大なる立場よりして山岳文學とか登山文獻とかを觀望し、又其の批評眼をステイブンの『ブレイグラウンド』に向けたる時評の言である。更に唯だステイブンの『ブレイグラウンド』其れ自体のみに批評の視圈を縮少し見る時は、我等は決してステイブン自ら如上の登山なるスポーツ確立の爲めの一種宣傳的企圖の下に彼れが彼れの樂しき登山記を誌せしものには非ずして、全く個人的感興又は一部の小範圍に於ける友人親しき讀者の爲めに誌せしものなる事を窺知し得るのである。即ち彼れは『ブレイグラウンド』第一版に於ける序文中に誌して曰く、

『是等（『ブレイグラウンド』の内容を指して言ふ）の大部分は元來小範圍に於ける、そして甚だ親しき讀者の爲めに誌せしものにて、余の其れ等の記文に筆執りつゝ在りし間、余は常に絶えず余の眼前に、余等の友人が或る瑞西山中の小やかなる旅館の戸口に座して、激しき一日の登山の後に於て如何にも樂し氣に平和にパイプを燻しつゝ、余等が『店頭』と其れを隱語して呼んで居る所の、普ゆる事に亘りて、上は大僧正から下は土工に到る迄の人々が語る所のもの迄に豊富に話題を捉へて愉快に放縱に談笑する様子等を想起して居たのである。然れば其れ等の記文は單に其の時は一種不可思議な興趣を有し、又今日に於ては回想してさえ愉快なる其の時の案内者、雪の斜面、山稜、ロープ、氷河の割目等に就て採り交はされし愉快なる會話を長くして記せしものに他ならぬ。去る著名なる畫家は心胸内に莊重なる感を保持して制作に従事せんが爲めに宮廷服を着して彼れの畫板に向ふを例とせしと言はれ居るが如く、余も又此れ等の其れとは反對に甚だ品位無き拙文を誌するに當つてさえ古い。時代後れの、そして煙草の香の浸み、又屢々結んだロープの擦痕の尙ほ消えて居ない余の獵服を着けずには殆んど爲し難かつた所である。……』

然れば此の書は主として余の登山仲間所謂登山狂―斯く呼ぶ事を許されるならば―である人々に主として提供せらるべきである。然して余は又多少粗野ではあるが、文中最初に此れ等の文を誌せし時と全く同じ悦びの感の尙ほ残存しある事を希望するものである。余は嘗に此れ等の記文を全然感興に任せて記せしのみならず、又余は其れ等と全く其れ

等の記文の中に記されし時と同じ感を以つて再び讀みたるものである。然れば最も寛大なる批評者にしても、其れ等の余自身の個人的感興が此れ等の記述に關係ある人々以外には何等他を益するものゝ存せざるものであると言ふを得よう。然し乍ら、何れにしても、余自身の此れ等の記述を讀みつゝある間に於ては、常に此の倫敦の憂鬱なる霧は忽然彼方に散じて、余は永劫變らぬアルプスの高邁なる山姿を眼前に垣間見るを得、登り攀ち行く我が行途のテムニイ・ポットの上にシユレックホルンや又はユンクフラウの莊嚴なる絕壁を仰ぎ見る事が出来るのである。然れば若し余の此れ等の記文が余に迄顯現せしと同様の幻影を他の人々にも喚起せしむる事が出来るならば、始めて此れ等の記文も眞實讀まる可き價值ある事と爲るのであらう。若し其の如くなりとせば、其れ等の記文は同じ山谷の間に勞する同じ仲間には多分其れ等の幻影の微けき陰影の如きものを暗示せしめるかも知れぬ。云々と。

此のステイーブン自らの謂ひし序文の一節に依りて我等は前述せし如くステイーブンに對する非難糾弾の當らざる事甚だ遠きを知る者である。ステイーブンの文は洵に英國に於ける登山文献中比類稀なる名文との頌詞を以て評せらる。此處に其の賞讃的批評に果して其れが相當するや否やは筆者如きには固より何等確め得可き所に非ずと雖、尠く共ステイーブンの文が其の根柢に於て最も純回なる登山者として分子を多量に包有するの一事は、安んじて筆者自身の爰に明言し得る所である。

或る評者に依れば、抑もアルプスに關する散文型文献のクラシックスなるものは、此れを二つの種類に分つ事を得と謂ふ。ウインバー、マンメリイ其他の人々は登山の冒險的物語と共に其れと對照的に往昔希臘人が鑑賞せし如き死の陰影の下に於て經驗する勝利と失敗と嬉戲との勉強を吾等に與へて呉れしものである。ウインバーは確かに最も大なる登山史上の冒險譚を書いたが、然し山岳の風光を叙するより稀有なる天賦の才幹に於ては彼れは又地の登山者よりは甚だ劣れる程度のものでしか有しなかつた。彼れが有名なマッターホルンの山頂に初めて立ちし時に於ける其處よりの展望の叙述は單に其の點より望見し得可き遙障を列記せる退屈なるカタログに過ぎぬ。而して此の一事は又同様に他の山頂よりの展望の場

合にも適用せられるものである。然るにウインバーの其れと對照してレスリイ、ステイブンの其れに到れば、彼れは巧みな筆致にて、尠しも努力を拂はぬ魔術を以て、彼れ自身と共に讀む者をして不識不知の間に彼のシュレックホルンの積石へ迄誘ひ伴れて行くのである。拙劣なる記述者の山岳の叙述は千偏一律的な同じ性質形容詞を用ひる。例へば、峯は高く、雪は白く、樅は暗色に、山頂よりは遙か遠方迄見えると言つた態のものである。斯くの如きもので山頂よりの景觀の叙述が充分ならば唯だ山頂の名を變更しただけで何人にも要求せられし山頂の展望を容易に叙する事は出来るであらう。然らば山岳の叙述の秘訣は全く他のものと明らかに異りたる章句、語彙を見出す事にあるのである。而して文才とは景觀を見て其れを類推するの秘訣を會得せる事と言ふ可きである。其故若しもステイブンが *The Playground of Europe* の如何なる部分の章句を抄いて見るならば、吾等は例へば大洋、音樂、阿片の幻夢、アラビアン・ナイト等の不可思議な何等聯絡無き源泉より引かれたる折々の類推に依つて是迄腦裡に印象せし美意識を突然甦生されるのに驚嘆せずには居られないのである。(註)

註。以上の文意は此れを Arnold Lunn 編の *The Englishman in the Alps* Being a Collection of English Prose and Poetry relating to the Alps. (1913) の Introduction 四—五頁に誌されたる部分に負ふ所が多い。

例として左にステイブンの文を二・三邦文に移植して見る事とする。先づ曩き少つと引例された彼れがベルネーズ・オーバランド最險の峯グロース・シュレックホルンを初登頂せし際に於ける該頂よりの展望を叙したるものから始めよう。

『偉大なオーバランドの峯々——フインステラルホルン、ユンクフラウ、メヨンヒ、そしてウエツターホルン——は物寂しき雪の荒野の向ふに急峻に岩の露き出した顔を見せつゝ、怖い圓陣と成つて四周を取り圍んで屹立して居る君の足下は「沈黙せる雪の墓所」である。そして其處はグリンデルワルト氷河が巨大な、憂鬱な氷柱の如くに、然し其れも此れ等の偉大な貯氷藏の大きさに比すれば全く取るに足らざる容量にて徐々に流れつゝ、人々の力に依つて耕作された低き地域へと降つて行く事の出来る供給物を引き出す所である。今や君は恰もグリーンランドの風光の其れか、さ

もなく彼の到底制止し難きメキシコ灣流の未だ押し寄せ來たらざりし以前の海邊を有せし、氷河時代に於ける英國の想像畫の其れを想はせるが如き全く荒涼凄愴たる地の中心に在るのだ。此れ等の景觀の魅力——此れ等の景觀は所謂繪畫的景觀に對してのみの自稱的讚嘆者からは一般に認められる事は尠いが——は、其れを信ぜざる人々には容易に説明し難いが、余の好尚鑑識に適ふ事は比類無しだ。洵に此れ等の景觀は恰も緩徐にして莊嚴なる音樂か或ひはドウ・クイン・クインシイの描きたる恠奇なる阿片の幻夢の一つの如く、一種の慰撫鎮痛的な力を有して居る。若しもドウ・クイン・クインシイにして物靜かなるカンバーランドの丘陵地の代りにアルプスの峠を越える郵便馬車の旅行を爲す事が出來たとせしならば恐らく彼れは「夢の音樂」の中の公使の其れよりは尙ほより詩的な幻想を夢みたであらう。然し余は勿論ドウ・クインシイと張り合ふ事などは到底出來ぬ故、余は唯だ其處には山岳と平野の廣大な地域の光景の中に殆んど此の世のものならぬ、明らかに山中の雲霧の如く虚浮にして、定かならぬ地平線の彼方へと臚けに消え去り行く或るものがあり、そして然かも其のものは絶對的なそして永遠の沈黙に依つて呪ひ封ぜられてあるかの如くであると謂ふ事を言ひ得るのみだ。然し若しも嵐が怒りつゝあつて、雲の切目を通して山嶽の黒き山嘴が君を睨め付けて居るのが見えるのみの時と、完全に好く晴れて、蒼穹の大なる全天蓋に煙霧の花冠の一片だに認められず、穩かな休息の非常に快い、懶惰な感覺が最も適當な心の氣分であるが如き時に、シュレツクホルンの頂上に在る時との間には其の感じは甚だしく相異してあるかも知れぬ。手は何等爲すべき特殊な責務を有たずに、靜かに其れ等の荒涼たる岩上に腰打ち掛けつゝ、遙か平原の小さき陰影の皺襞を恰も眞實の山脈が緩徐に移り行く地質年代を通して下降隆起するかの如くに打ち眺めつゝある時には、吾等は恰も或る不死不朽の生物なるかの如く感ずる。余は幸ひ此の余の夢想を擾す様な又は全く一致しない様な聯想を言ひ出す様な同行者を持たなかつた。斯くて山頂の一時間は數分間の如くに過ぎ去つたが、併し其れ以上に山頂の出發を遅くせる事を奨め難く、する様な、遭遇す可き困難が尙ほ其處に存したのであつた。其故余は更らに我等の積みし積石に二三度手を觸れ、然る後下降す可く其れより振り向いたのであつた』(The Playground of Europe, second edition.)

次ぎには嘗てコーンヒル・マガジンに掲載せられ評高かりし名高いステューブンの名文たる彼の『モン・ブロン山頂の日没』Sunset on Mont Blancの一節をぬ。

『併れ共此の好晴なる日には流石に電光も憩ふて居た。其れ故我等は既に我等の足下に遙かに杳渺と延び擴がれる峰々の廣漠たる荒野の遙望に親しむ事が出来た。低き山々の系脈は恰も穩かなる日に海面に單調な迂りに依つて形成せられる海波の如くに平行の列に並んで居るかの様に見えた。そして總べての山稜は唯だ頂線だけを鋭く輪廓附けて、我等と其れとの間に横はる大氣の層の爲めに皆整一な色調に混り消えて居た。然も其れ等の山稜の遠近は唯だ色調の繊細なる濃淡に依つて識別せらるゝのみである。斯る景觀は我等が唯だ阿片の幻夢に於てのみ期待する事の出来るが如き力強き、然し暗影的な印象を與へるものである。杳茫廣濶なる遠景は其れ自体定らならず低き空と混ちたるが如き程に遠く地平線に長く打ち續いて居る。併して其は永遠的な平靜と不可思議にも結合せし漠たる暗示を有して居る。全く靜まり返へれる渺茫たる水面上に一個の小石を投けたとして其れを想像すれば、其の各々の漣波は總べての細部が悉く紫色に融け消え、其の最も遙けき波及は神秘なる無際涯の中へ融合して行つて居るかの如くに見える彼の高き山脈と目する事が出来る。我等は恰も連鎖せる餘韻ある佳調を有する或る歌曲の中に悲歌を聴く時の如くに、一種慰撫的な憂鬱な感覺を以て此の景觀を眺めやるのである。前面の山々の中途が彼方に我等は正に變轉しつゝある紫色を通して輝きつゝある、靜穩なジュネヴァの湖水の長き延長を望む事が出来た。然し我等が背後には偉大なる山々の氷頂は、未だ我等が仕事は終らずと言ふ事を我等に思はず可く、尙ほも我等の上に誇らし氣に聳えて居る。幸ひにも暗青色の穹窿の巨大なる凹面の下には辛うじて一の片雲が見られるのみであつた。此の人寰隔りたる下界の一角に立つ我等の頭上を卷雲の二三の輕快なる汽艇が穩かに動きつゝあつた。其れ等の片雲は此のアルプスの最高の峰頭へさへも自ら卑下して低くは降りては來ぬものである。併して其れ等の片雲は例へ極めて微々たる、且つ消え易きものには過ぎないが、然し其れ等は

恐らく將來の天候に對して不吉な表示を爲すものである。然し乍ら現在の好晴は我等の所有である。高き次の一角の周りに嘯く風の僅かの息吹でさへも我等に凍傷に對する可能力を有つ事を思はしむる程に鋭く冷たきもので有り、又擦附木の火を風影にせねば吹き消して仕舞う程の風力を有つて居た。……………

峯より峯へと高き雪原は薔薇色の光輝を捉へ、繊細なる薄光の暗き擴がりを横切つて烽火の如くに輝いた。恰も彼の英將クセルクセスが往昔其の三軍を俯瞰し、百年の後能く生ある者一人も在る無きを想ひて涕泣せしが如くに我等も此の今や懣ひに迄沈み行く數知れぬ敵たる峯々を一種の感慨を以つて眺め渡した。併し其の時の我等の感慨は彼れの其れとは寧ろ甚だしく異つて居た。即ち、我等は思へらく、恐らく百年後我等が既に其の時より長き以前に最早自然の斯る演技に對して何等の感興を有つ事を止めて仕舞つて居る時に於ても、尙ほ且つ此れ等の峯々は今夕と全く同じき事を爲しつゝあるであらうと。然る時突如としてより、驚く可き現象が始まつた。我等から隔たりて其の頂點を尖らしつゝありし巨大な一つの圓錐形は突然其の下の世界から切り抜かれし如くに望まれたのであつた。夜は其れと境を接して居た。そして黄昏時の薄明は尙ほ總べての物象を取り巻いて居た。青き霧は其れが落ち行く個所に於て冷えつゝあつた。そして瞬間には我等は此の不可思議な景觀の源泉が何んであるかと言ふ事を殆んど語る事は出来なかつた。然して此の時或る豫期せざりし變化が更らに此の日没時の番組に加はつた如くに思はれた。恰も劇場の緞帳の大きな立襷が急に崩れて幕が開くが如くに、其の變化は景觀の一部に落ちて來た。勿論一瞬間の考想は此の惟奇なる景觀への闖入者が何んであるかを充分に説明せしめた。其れはモン・ブロンが總べて其の周圍のより低い山々の上に己れが高きを示さんとして爲せる、其れ自身の巨大なる姿影であつたのだ。其の姿影の輪廓の何んと鋭く剗然としたもので在つたかを、又此の黒き金字塔と其れの及ばぬ微かに光りを享けて居る部分との對照の何んと驚く可きものであるかを言ひ表す事は難事である。其れは巨きなインキの汚染が大なる風景の上に突如に落ちた様に望まれた。其れを凝視めつゝある間、其の影が動くのを我等は認める事が出來た。陰影は山稜から山稜をと次第に呑み込んで上つて行き、其れの鋭く尖つた頂點はアオスタ

の廣き谿谷の見易き目印の地から地へと徐々に這つて行つた。此れに依つて觀れば眞實我等は其の表面が山岳と谿谷の重疊せる數千方哩もある、巨大なる日時計の指針の尖點に立ちつゝあつたのである。』(ibid. chap. XI. pp. 301—303, 310—311)

以上二つの拙劣なる譯文よりしては甚だ原文を讀める人々には憚焉たらぬ乍らも既に前述せし如くステイブンの山岳景觀の描寫に於ける豊富なる語彙と頸拔なる類推譬喩を見る事が出来るのである。即ちシュレックホルンの山頂よりしてアルプスの氷河地帯を該山頂より眺めては彼れはグリーンランドの荒涼死の如き氷景を想ひ、氷河時代に於ける英國の何等生の示唆無き落莫たる風光を想像し、其が山頂の大觀のエフェクトはドウ・クインシーの幻妖なる阿片夢に譬へられ、又モン・ブロン山頂よりの日没の叙述に於ては、恰もクセルクススの如き感慨を以て登山者に取りて敵なる無數の山頂の海を瞰下し、モン・ブロン自身の山姿の足下に映ずるを見ては恰も日時計の指針の尖點に立つと譬へし邊りは洵に彼れ獨特の描寫の一端にして他の登山者の到底追隨を許さざる範圍であらう。ステイブンの記述は總べて先づ斯くの如きものと看做して好いと思ふ。彼のサツス・マオールやバラ・デイ・サン・マルチノ等の恠奇にして幻妖を極めた岩の塔の並立せるドロマイツの特異なる荒涼寂寞たる風光を如實にせる The Peaks of Prinnio や夏に比しては全く異なりたる感ある冬のアルプスを叙せる The Alps in winter は同様に又彼れ獨特の叙述法に依つて多くの人々を魅了した所である。ハロルド・スペンダーの言ふ所に依れば、ステイブンの文はアルプスに關しての英國での散文としてはラスキンの其れに次ぐ可きものであると謂ふ。

扱て翻つて以上の如きステイブンのものせし散文其れ自体に關する事を離れて、一体登山者としてステイブンは如何なる傾向の登山者で在つたかを觀る事としよう。ステイブンは既に前述せし彼れの登山記録よりしても看取し得る如く、英國山岳會設立當時に於ける、所謂 "Peaks, Passes, and Glaciers" 時代のヒーローであり、其れ以後一八七〇年代迄の活動的時代を有ち、更に其れ以後も温和な登山を續けて居た。然ればステイブンは純英國山岳會系統の登山者である

そして近代の登山者よりしては『正統的な山岳崇拜の高僧』と稱せらるゝ者である。

確かにステイブンは正統的な登山者であつた。彼れの登山経歴、發表せる登山に對する見解等は最も雄辯に之れを立證して居る。ステイブンは彼れがアルバイン・クラブの *Comitee*, *Vice-president* *president* と其れをリードする地位に在りし間に於て彼れの抱懐する登山の各事項に就ての意見を數多く發表して居る。勿論彼れは例へば *One traveller with one guide* の主義やガイドレス・クライミングに對しては反對の意見を有して居たし、殊にアルプスに於る危険に關しては最も深く彼れの意見を正統的な見解の下に置いて居た。英國山岳會歴代の會頭としてステイブンとチャールス・エドワード・マッシュウスとは此の點に關しては最も強硬なる正統派にして、共にアルバイン・チャールナルに於て此の問題に就て多くの所論を發表した。然して其の所論は當時登山界の異端派と目されて居た所謂 *Modern Mountaineer* として知られた後代の登山者(例へば其の顯著な例はマンメリイの其れに對する抗論である。)との間に爭論を惹起したのであつた。試みに彼れの該問題に關して爲せし言説のリストを擧げて見るに、一八六六年ステイブンは英國山岳會のプレジデントたりし時に於て '*Alpine Dangers*' なる題下に於て彼れの所論を英國山岳會々合の席上で力強く説述した。同文は *A. J. vol. II. p. 278* に掲載され、又『*ブレイグラウンド*』第一版(一八七一年)に再録せられたが、同著第二版(一八九四年)に於ては彼れの見解に相異を來たし、既に同文中に於ける彼れの所論の舊式なるを知つて除外した。然し其の當時は彼れの所論は大なる影響ありしものゝ如く、同文の概要は瑞西山岳會年報第三卷五六二頁以下に於て掲げられ、又其の全文は『*レオ・デ・ザルプ*』誌一八六七年の通し頁八一頁以下及び佛蘭西山岳會リヨン支部々報一八七八年通し頁七九頁以下に於て共に佛蘭西譯して掲載せられた。一八六九年には *J. M. Elliot* 及び *H. Chester* の災禍に關して '*Recent Accidents in the Alps*' を *A. J. vol. IV. pp. 373-9* に於て發表し、一八七〇年には前出エッチ・チエスターのリスカムに於ける災禍に關しての *W. E. Hall* の所論に關してのノートを *A. J. vol. V. p. 33* 以下に載せ、一八七一年には *Beane*, *Corkendal*, *Randall* の三氏が八名の案内者と共に一八七〇年九月六日に於てモン・ブロンに於て災禍の爲めに死せし事に關してのノートを *A. J.*

vol. V. pp. 188—90 に掲げ、最後に一八七五年には Col des Grandes Jorasses に關する T. Middlemore の文中に於けるアルプスの危険に關してステイブンの所論に反對せる事實に對する彼れの答解たる 'Letters on Alpine Dangers' を A. J. vol. VII. pp. 311, 404 に載せた。然し乍ら長きステイブンの登山者の生涯を通じては其の後年に於ては多少の見解の相異を吾等は認めざるを得ないのである。即ち彼れは其の著『ブレイグラウンド』上梓前の時代に於ては、登山なるスポーツ（彼れは登山を全然スポーツと觀じて居たが）を英國に於ける多くのスポーツの第一位（或ひは尠くとも第一流）のものと爲し、斯くて登山史上の拘欄幸福なる時代の黎明は輝き初めたが、其れ以後の近代的登山の時代に到る迄には彼れの登山に關する見解は其の根柢に於ては固より一貫せるものであつたが、其の表面に於ては、細葉に於ては多少の于餘曲折の存せし痕を吾等は看取するを得るのである。譬へば其の一例として擧ぐるに、登山史上での一大問題にて、往年ステイブンの強硬に反對せしガイドレス・クライミングに關してもステイブンの所論は永き登山經歷の間に於て發表せし間に云爲せる爲め、時間的推移を除外せば一の明白なる矛盾撞着の歴然たるものがある。即ちステイブンは彼れが英國山岳會のプレジデントの地位に在りし當時に於ては、未だガイドレス・クライミングに對して之れを認容する事が無かつた。即ちステイブンは彼の一八六五年のマッターホルン災禍の日に先立つて、左の如くガイドレス・クライミングに對する彼れが意見を述べて居るのである。

*In my opinion, if ever it becomes fashionable for English travellers to attack the High Alps without guides and without due experience, the era of bad accidents will begin.....According to my experience, no traveller that I have ever seen would be worthy to be ranked as even a second-rate guide. The difference between professionals and amateurs, generally pretty well marked, is wider in this than in almost any sport, and for the simple reason that there is a greater difference in experience. The guide has been practising during his whole life, the amateur during a few vacations, of which the first was probably after the time at which athletic sports are best learned.*

此の引用は彼のクローリッジが其の著 *The Alps in Nature and History* (1908) に於る *Modern Mountaineering* なる章の

終尾にガイドレス・クライミングに關説して、彼れと同意見を抱懷せるステイブンの言説を引用して、彼れの意見に代へて居るものである。

然るに其後又彼れは一八八〇年代に到つてはガイドレス・クライミングに大なる賛意を表して居る。其れを窺ひ得る彼の言質は左の一章句である。

*It has always been my opinion, that a man should, if possible, qualify himself to climb without guides……every vigorous young man should try to place himself in the class, which can displace with guides. That is the way to restore the charm of novelty to peaks already climbed. (Alpine Journal XIII.)*

尙ほ此の他ステイブンの登山に對しての具解として晩年に於て著しく吾々の心胸を打つものは、其の黄金時代の極めて熱烈なるピークハンティングの態度が、漸次老ひ行くと共に其の境界を脱して温和靜觀の態度に移行せし事なるが、固より是れ人皆老ゆるに及びては漸く現在と離隔して、今は己れの爲す事能はざる往事を追憶し、自ら態度温古平靜と成るは自然の事にして、ステイブンに於ても亦其の例に洩れずと雖も、彼れが漸く結婚後に到りて終ひに強烈なる肉体的活動を所要するが如き登山を行ふ事適はざるに到りたる登山者としての悲嘆を誌せし『ブレイグラウンド』の終章 *The Regrets of a Mountaineer* の如きは其の感慨心境行文の中に溢れて讀者をして感ぜしめずんば止まざるものがあらう。然し乍ら要するに以上の事ありとは言へ、ステイブンの名はクライミング・ヒストリイに於ての純然たるバイオニヤとして、將た又堂々たる純正統派登山者として登山史上の黄金時代の光輝を彌や高めるものである。然れば既に曩きに述べし如く彼れが名は彼れが一八六一年八月十六日案内者クリスチアン並びにペーター・ミケル及びウルリツヒ・カウフマンを伴ひて初登頂せる彼のベルナー・オーバー・アルペンの峻峯グロース・シュレックホルン(四〇八〇米突)の山姿と共に永久に消え去らぬであらう。其故『彼の英國現代の文豪トマス・ハーデイは其の山を想ひステイブンを想ひて、次の如きソネットを書いた。』

『高く氣まゝなるものゝ如くに、

その荒涼の姿は

近づく我が眼に輝きて

聳ゆるアルプスの高山としてよりは

寧ろ彼の姿かとの見ゆ、

生と體とを賭して、その角を攀ぢし彼は

奇怪なる暗影、鋭き光、峨々たる装の、

己が人格に似たるを、臚ろけに思ひたらんか。

彼の最後の變に、生の鈍き帯の解けし時、

彼も昔ながらの愛にひかれ、山の方に逃れ來り、

彼れの心の永遠性は

この點せる金剛の形に入り

彼の低き聲は、その斜面の雪を訪ふならんか、

登山者を呼ぶ曙の、その雪を赤く染めなすとき。』

『死せる哲人の靈は形骸を脱して、生時慕へる山岳の雪の懷に逍遙するのみならず、殆んど化して山となれるならんとうたへるは、我等の共鳴を促すこと切である。』(登高行第三年岡田哲藏氏「山岳と文學」頁一九—二〇) (完)

筆者附記

此のステイプンに就ての小稿は彼れのアルプスに關しての唯一の著 The Playground of Europe を主題として草せるステイプンの登山者としての小傳に過ぎぬものである。彼れの登山者として以外の生涯傳記は是れ固より此稿の可能的簡略に記せる所である。而して其等登山者として以外の彼れを傳ふるものには屢々本文中に其の引用を見たる劍橋大學の Prof. F. W. Maitland のステイプン傳 The Life of Sir Leslie Stephen は筆者の知る限り最も完全なるものつちである。

# 手稲山を眺める

岡村生

——大正年間十五年のスキー想出の一端——

大正年間のスキーは北大スキー部の生れて後の十五年のスキーである。三角山に始めてスキーの生れたのも殆ど大正の初年に屬する。札幌スキーの中心である三角山ツ、ザ山的一端に立つて、飛躍的に進歩したスキー界の狀勢が連る山々の姿にはつきり結びついて想ひ出されて來る。

三角山は永遠に盡きないスキーの想ひ出である。日本にスキーが入ると同時に、此の三角山麓にもスキーのスプールの印せられたのだ。今でこそ元老の役に鎮まつて居らるる稲田先輩や三瓶氏の最も古いスキーの産業役を務めた所も此處だ。

年月の進むのは實に早い。その昔當時の先覺者が轉倒滑

りで終始した場所を、今は婦人子供までが廣い大きなスロップの一小部分として一顧もせず滑り去つて居る。當時は絶壁であると眺められたであらう所の急坂には、立派なジャムビングヒルが建設されて、ランディングの高い音は引つきりなしに三角山一帯に響いて居る。

當時のスキーマンに取つては非常な難所であつたらしいツ、デ山よりシルバースロップに至る一帯の尾根も、今はスキー競走のコースとしてスプールの消える暇は無い。その尾根の一端より北西方を眺めると、手稲連山は發寒川の流域西野の谷を隔て、廣大な山容として觀られる。

此處より眺める手稲の山容も毎年の如くに變化しつゝあ

る姿としてスキーマンの眼に映つたに相違ない。スキーマンの搖籃時代である明治の末年に於ける手稻の嚴かさ、大正の代になり更に年を経て昭和を迎へるまでの姿は、頂上近くの針葉樹の黒みが少しく減つたといふ以外には何等我々の眼に入る光には變りないが、心に影響されて居る眼に映る像は遙かなる變化を示して居る。

十數年前の手稻登山は此の發寒川上流よりのみ行はれ、その登山コースの甚だ困難に感ぜられ應用するスキー術の幼稚であつた時は、此處から眺められた手稻山は餘りに偉大な恐ろしさに充ちた自然の姿として在つたであらう。北大寮歌にも殆ど常に歌はれる手稻の頂きではあるが、いざ嚴寒の雪深き時の手稻は近づくべからざる尊嚴の姿に變つて居た事であらう。手稻村へ長くく續く白樺に覆はれたスロープも、如何に思案をこらし、身心の異常な緊張を以て大きな決心の後に滑降せられた事であらう。藻岩山に登るにさへ水盃きをしたといふ程ではないか。

然るに今の手稻山、先輩の苦心の跡の大きな恩恵に喜びつゝある我々の眼に映ずる手稻山は如何であらうか、冬の手稻は夏よりも一層親みのある悦樂の地としてしか見られ

ないではないか。登山道路は幾多の研究經驗に依つて昔の道を迎へる者は一人も無く、いと樂に簡單に輕川停車場から短時間の登降で充分の快味を貪りつゝある。手稻の頂の陰には年來の望みであつた慕しいヒュツテの設立さへ達せられた。その屋根からゆらく立揚る白樺の煙さへ、今此處より眺める眼には手稻の全山をすき透して映つて來るやうだ。上等なスキーと巧みなラツセルは二時間で麓よりスキーマンを頂へ運んでくれる。降りて急がしくすれば三〇分で輕川の停車場へ飛び込める。實に標高一千米の手稻登山は朝食前の仕事になつて來た。ヒュツテを未明に出て頂上の朝日を拜して、直ちに札幌の學校へと汽車を急がせれば立派に遅刻しない出席學生となれる。

平地に雪の無くなりかける四月上旬でさへ、雁皮平の雪のシャンツエでジャムブらしいジャムブを確かに味へるやうになつた。二〇米をやつと越えて居た數年前のジャムブを、今此處のツ、ヂ山から眺める手稻山の裏で、盛んにやる人が續出して來た。

競走のコースも年々延長されて來た。大正年間の競走での勝利の鍵は、此處のツ、ヂ山尾根一周の技倆如何にあつ

たのだが、今年は長く続く長距離コースは向ふの手稻山麓にまで延びて、發寒川流域は全く一大競技地と化して行きそうだ。雄大な滑走によつて競走の快感が眞に生れ出でんとして居る。

こうして手稻山と三角山の距離は年々近くなり、迷路の手稻山路も全く透明なるヒュツテを中心に幾多の行樂の道を持つ山容として現はれ、更に手稻、奥手稻間の距離も接近し登山コースは遠く定山溪、余市岳方向までにも次第に延長され且つ近づき親しみを深めつゝある。

手稻の右に連るのは三段山（百松澤山）で、やはり奥手稻連山のうちに含められるものであるが、之を越えて定山溪へ乗り込む回数が多くなるにつれて、暖い温泉の湯氣は三段の頃までいつも迎へに來て居るやうに感ぜられる。万死に一生の思ひで定山溪越えをやつた友の話や、今は遠く去り再び還らぬ板倉兄等との難行軍等の想ひ出に比して、余りに變つた現在のスキー界を見せつけられるのである。實に隔世の感あるではないか。

輕川の停車場には日曜毎にスキーが林立する。圓山、三角山は黒くスキーマン否スキービープルで充滿して居る。

バージンスノーの快感を得ようとするには、斷然たる決心を以て山深く入らねばその核心に觸れられない。

毎年々々新しくシーズンを迎へる。そしてその終りには驚くべき勢で進展したスキー界を顧みる。此の現在の状態が、今後の昭和の御代の何時頃まで續くであらうか。如何なる程度までスキーは普及するか、如何なる好記録が生れるか。再び來るであらう十五年後の日本スキー界を、再び此處のツ、デ山尾根より眺めて、大正の十五年のスキー界を顧みた想ひ出を更に遠い歴史として想ひ浮べたいものである。そして幾多の尊い犠牲とまでなつたスキーの友の靈にも、此の榮えつゝあるスキー界の狀態を絶えず告げ知らせやうなものである。

(二、四、一六)

\* \* \* \* \*



トムラウシ山よりオプタシケ山脈を望む 山口健兒

# 川名のアイヌ語解

—特に北海道山岳地方に於ける—

山 口 生

讀者が表題を読まれたときに少からず奇異の感にうたれ

られるかも知れないが我々が北海道の高山に登山せんと考

へるときには第一にまづ澤の研究から始めなければならな

い。その澤が通過出来るか否かは或は一つの登山の成否を

支配する力を十分に持つて我々を威嚇する。我々は全然未

知の澤に對して幾分なりとも概念が持ちたく思ふとき先住

民族アイヌ人に依り名づけられたる川の名によりて、それ

の日本語譯によりてこれが目的を達する事が出来る。原始

人の感情の表現は單純であるからその命名法も何等の修飾

も用ひず、簡單にその全性質を表して遺憾ない場合が多い。

同様に山の命名に於ても亦然りである。故に本稿に於て

はその上流の山にも及ぶつもりである。

今二の例を山名にとりて舉ぐれば

**ヌタツカム・ウシシユツベ**(大雪山) 頬の山の義、

山頂が禿けて草木なきこと恰も頬の上部に髪なきに譬

へたるなり(北海道地名解)

**オプタテシケ山** 槍の逸る山の義なり。この山の相貌

は中腹以上甚だ急に峭立する故にこの名あるならん。

**トムラウシ山** 花葉の場所の義、トムラウシ山はその

東南十勝に面する山腹は湖沼甚だ多く廣大なる濕原(

高山濕原)をなし花野の美しきものある外、高山植物

の御花畑の著しきものあるを意味するに非るか。(山岳

第十二年第二・三號小泉秀雄氏北海道中央高地の地學

的研究)

**ニセイカウシベ山** 絶壁のある山の義、峰頭嵯峨として

急峻な絶壁をめぐらしてゐるによりこの名あるなり。

以上の例に見てもそのアイヌ名の日本語譯にてその山の性質の一端をうかがうことが出来るのである。而して私は登山に密接な關係のある各河川の上流地方の各支流に附せられたるアイヌ名を私の力としてではなく主として

Ainu-English-Japanese Dictionary (including a grammar of the Ainu Language.) By the Rev. John Batchelor F. R. G. S. によりて又、山岳第十二年第二・三號の小泉氏の研究により又北海道地名解その他を参照して羅列しやうと思ふ。

先づ北海道中央高地の各河川より述べる。以下大体參謀本部陸地測量部五萬分の一圖幅に依る。あまり必要でないのは筆者の方にて取捨す。

**石狩川上流** (参照圖幅ヌタクカムシユベ山、上支湧別、旭岳、石狩岳)

旭岳、石狩岳

**石狩川** 回流する川、迂餘曲折する川の義

層雲別より上流をあぐれば

**層雲別川** ソーは瀧、ウンは「の」又は「ある」の義ベツは

川なり(ベツとは兩岸に多少の平野を有するものを云ふ)即ち瀧のある川の義なり。

**ニセイケシユオマツブ川** 絶壁の下にある川、又は

絶壁の下にある處の義。ニセイは絶壁の義なり。

**ニセイノシオマツブ山** 絶壁の上なる川の義。

**ニセイカウシベ山** 既述。

尙この山の東を北流するチカルベツ川(茅刈別川)は滴る谷川の義。

**ワクカベケレベツ川** 白き水の川の義 (五萬分ノ一

ヌタクカムシユベ山には白水川とあり)

**シユマフレベツ川** 赤き石の川の義(五萬分ノ一ヌタク

カムシユベ山には赤石川とあり)

**ヌタクカムシユベ山** 既述。

尙、上支湧別圖幅に於て屏風岳の北側を流れてゐる川の本流との合流附近をシユオブニセイと云ふ。箱の如き絶壁の義なり。

**ニセイチャロマツブ川** 絶壁の口なる川の義。

**ホロカイシカリ川** 却流の渦川の義(山岳第十二年)

ホロカは後へ向くの義（筆者曰、渦を巻きながらまがりくねつて流れる川の義ならん。）

**ユーニイシカリ川** 温泉のある迂曲折せる川の義

湯煮石狩と書くもよかるべし。アイヌ語にてユーニをユニと發音するも差支へなくユニは温泉即ち湯の沸騰して出する所を云へばなり。（山岳第十二年二・三號）

尙同書には「ユーニ石狩岳」の以下に金山の案内、稻垣春太郎の談として次の述あり。面白き故に再録す。

「稻垣春太郎の説く所に依れば石狩岳の附近に開作り温泉と稱する温泉ありて一定の時間を経過すれば必ず轟然たる音聲を發し熱湯と蒸氣を噴出するに依て名づけらると云ふ。間歇温泉の一種に非るか、先年（大正一・二年頃）新聞紙上に記して曰く「忠別岳化雲岳の頂上邊より測量用望遠鏡を以て東々南を遠望せるに、奥山盆地の大窪谷を隔て、石狩岳の山麓遙かに白烟の立ち昇る所あり。よく凝視すれば二三の人類らしきもの茅屋の側に蠢動するを見たり」と稱せしより石狩岳の水源即ち奥山盆地には原始時代の人類生活せり等の虚妄の言を弄する人多く、當時の新聞紙は原始人類の形態習性等を記するに至り、一時世上に喧傳して奇異の思ひをなさしめたるは少くとも北海道人士の耳底に存する所なるべし。是れ恐らくは山上より此の間歇噴泉の噴烟を遠望して想像を逞うせる結果かゝる根據なき説を撒布せしものなるべきか」云々。

**ムカ川**（武華山、無加山）ムカ川上流の山の義、ムカとは水上を越す義、ムは塞る、カはイカと同意義にて越すの義、此川、温泉三ヶ所に湧出するため氷ること遅し。

水凍つて流れ塞るとき始めて氷上を越すを得べし故に名づく。（山岳第十二年二・三號）

**ムリ岳**（武利岳、霧里岳）ムリはムリ草のことなり即ち

ハマニク（*Elymus mollis*, Trin.）のことなり。

**ユニ石狩岳** ユニ石狩川上流の山の義。

**音更山** 音更川上流の山の義、オトブケとは頭髮の多

き所の義、草深き所の意味ならん。

**石狩岳** 石狩川上流の山の義。

**ヤンベタツブ川** 冷水を汲む所の義。

**シヒナイ川** 鮭川の義。

**ヌタバヤムベツ川** 山間の平野を登る川の義、又は

彎曲せる個所の内側を登る川の義。

**クチャウンベツ川** クチャは獵小屋、漁舎の義、ウ

シ「の」又は「ある」の義、即ち小屋のある川の義。

又石狩岳に發源し山の西側に落下する川は幾何もなくして二個の大瀑布となり北流すこの附近をベテクト（水源の義）と云ふ。（未完）

藏 王 日 記 (承前)

—三枝茂雄君の死—

額 田 敏  
柏 木 民 次 郎

卅一日

昭和元年の末日は晴天に明けた。搜索の人々は早朝に出た。今日は後陣の積りで少し後れて出た。裏山の登攀はNにも可なり苦しかったらしい。宿の若者はずん／＼と私達を残して登つて行つてしまつた。今日こそはと登りを急いでも足は承知しなかつた。後鳥帽子、屏風、杉ヶ峯、刈田五色、熊野の諸峯がずらりと左から右へ展開してゐた。

これを寫真におさめるのに絶好の天氣だつた。鼻擦ハナコスリの登りは實にへたばつた。こゝを越えてからは樂に名號峯の下へと出られた。峯の三角點の少し上に眞黒になつた人々の集りが焚火をとり圍んでゐた。望遠鏡で名號峯から熊野一

帯の山腹をNと私と代る代る觀た。異狀は無かつた。あの積雪の模様では墜落するといふ懸念はとり去られた。又登つて行くと署長さんが下つて來た。さつぱり手懸り無しと言ふ事だつた。杖一本出て來ない所を見るとすつかり見當外れと思はれた。やつぱりもつと上、熊野岳から先方と思はれた。五六人を早くその方面へ登らせればよかつたと思はれた。(當日登つた人もあつたとの話を後で耳にした。)歸路には未だ見ぬ濁川の斜面とまぎれ込みそんな所とを搜索する豫定で人々は次第に引き上げはじめた。名號峯の頂の風は強く寒かつた。念の爲めにYとNと私と三人で尙もあたりをよく見た。これといふものも見つからなかつた。空はず

み渡つて熊野の頂はよく指ざされた。時間も大分たつたので同じ路を歸路についた。Yは私に心の暗くなる話、昔からこの邊で行邊不明になつた人々はきつと見付けられないといふ事を物語つた。スキーでこゝを通るのは非常に不得策であつた。樹が密に生えてゐる上にカンゲキの穴だらけでいやな下りだつた。峨々へは夕暮に歸へつた。夜に入つてから明日は第二次の計畫を實行する事になつた。それは熊野岳頂上一帯、殊に西側の斷崖の上下、杉ヶ峯の針葉樹林それから澄川の谷を搜索する事であつた。

晝の内に東京からSの兄さんと東電社員二人とが峨々に來た。私達の室には畏友Iとお連れの二人が加はつて賑やかになつた。Iは遠く京都からこの峨々へやつて來たのであつた。早速Sに關する事件の顛末、進路當日の天氣模様をお話してお意見を叩いた。朝八時に峨々を出發したとする如何に後れても名號峯では日は暮れなかつたはづだ。それで熊野岳の頂から西方があやしいとの事だつた。Iはやつぱり明日の搜索のはずの場所に目を注がれた。殊に熊の岳西方の斷崖に力を入れられた。Sの兄さんが室に見えた種々の愚痴がとりかはされた。生へのたのみの言葉がかは

された。廿八日を計算に入れて峨々を出てから九十時間餘も經てゐた。山中ではどうしても生存は覺束かなかつた。食料品携帯品がNの口から記憶をたどつて話された。

一、着衣(出發當時)

防水カーキ色亞麻製上着一着

軍隊下士用ズボン一着

毛メリヤスシヤツ二枚

毛メリヤスツボン一枚

毛メリヤス猿股一着

靴下三足

黒ラシヤスキー帽一

スキー用靴

二、携帶品(リュックサツク或はポケット入)

食料としては

ムスビ二個

森永の黒バン一片

乾葡萄一函

サンドウイツチ若干?

その他

毛糸編スウエーター一着

防水雨合羽一着

毛皮製手袋一組

毛糸手袋一組

防水布製手袋一組

舶來魔法瓶一個

コツホアバラート一組

固形アルコール一罐

アルコール入水筒一個

マツチ（罐入り）

寫真器一個

望遠鏡一個

舶來磁石一個

バロメーター一個

鞘入鉈一個

地圖（五万分ノ一、上ノ山、白石二葉）

スキー一、フィットフエルト式

アルミニウム製スキーチップ

（スキーの先端の破損を修理するもの）

兩杖、木柄、アルミニウム輪付

アザラシ一組

塗蠟用バラ一個

色眼鏡セルロイド縁

時計 呼子 等

（シユタイグアイゼン及雜品、食品の若干は俄々の温泉まで持つて來てあつた。）

これだけの準備では一日の山遊びには充分と見れたが幾日かを山に暮すには到底駄目であらうと考へられた。里に辿り着いたとしたならば如何にのんきなSでも金はたとひ持ち合せなくとも電報一つ位は打つだらう。どうしてもSはこの世の人ではあるまいとお互に感ぜられた。昭和元年も旬日足らずして過ぎ去つて行つた。曆日無し of 峨々山中の年の暮はさびしく不安に滿されたまゝ時は徒に過ぎ行くのみであつた。

昭和二年一月一日

新年の朝は明けた。例年の糶煮シルコの祝は無かつた。

第二段の搜索を進める日だつた。はげしい風が戸を叩いて山は黒雲に閉されてゐた。山頂へは行かれない。たとへ風

をおかして登つたにしても搜索などは思ひもよらなかつた。Sの兄さんはあれだけ多人數で昨日搜してもらへば本人も満足だらうし又私も満足との事だつた。忙しい中を人々を山中に長く引き止めるわけには行かなかつたし又天氣の恢復は測り知れなかつた。里人は皆な山を下りた。雪が少し降り出した。雪が来れば搜索は益々困難になるだらうと思はれた。降雪も久しい間無かつたのだ。スキーの爲めにはもう一降来なければ駄目だつた。そんな事は言つてゐられなかつた。降るな降るなと念じて來たのだ。絶望の淵に立つ思ひだつた。仙臺の友から爲替が届いた。午後から畑で滑つた。幸にたいした降りにならなかつた。

一月二日

風が強かつた。とても賽の碓から上には顔むけも出きそうになかつた。友を訪ねて山に行かれなかつた。残念だつたが致し方も無かつた。多人數の搜索も人里遠い所なので度々は實行され難く思はれた。この上はNと私とそれから峨々の人々の應援を願つて根氣よく小部分づゝ探がすより外に方法も考へられなかつた。仙臺のIから小包が届いた。シユタイグアイゼン、ラテルネ、蠟燭が澤山と、干柿とモ

チが若干入つてゐた。うれしかつた。宿の主人が高湯の辻やからの手紙を持つて入つて來た。Sは高湯には行かなかつた。午後は畑ですべつた。夕暮近くIがスキー小屋から下りて來た。私の顔を見ると直ぐS君は高湯に下つたそうであつたねと言つた。私にはこの話は初耳だつた。誰からの報か、郵便やさんに今朝聞いたのだをうた。私が宿を出て電報も來た様子も無かつた。宿に歸つて眞傷を確かめようと直ぐ下りた。乾燥室の入口で若者の話に依ると遠刈田から今日登つて來た二人のスキーのお客の報らせにSは高湯に下りたといふ電報が遠刈田に着いたといふ事だつた。眞傷相半して來た。Nは遠刈田まで確めに行く仕度をして出る所だつた。私のリックサツクの中には黒バンと湯とがあつた。これを食べて一緒に下らうと考へた。宿の臺所の爐の端に腰をおろして人々の話しを聞いた。暮れ易い谷合の日は暮れた。天麩羅をあけてゐた宿の老婆は電報を否定した。いくら人情が薄くとも幾々に一番先きに知らせるはづだつた。暗い雪道を下る必要はないと主張した。Nも氣ぬけしたらしかつた。遠刈田へ下る事は中止して一風呂浴びた。眞なら明日でもよいではないか。吉報なら後れた

つてよいではないかとNと言ひかはした。ビールを飲んでぐつぐつと寝についた。

一月三日

目を醒ますと外は静だつた。空を見た。未だ明けきらない空は眞黒だつた。深淵のやうな寒さの奥に星がきらめいてゐた。天氣は恢復したのだつた。熊野岳一圓と杉ヶ峯への進路を搜索にと宿のYに應援をたのんでNと私と三人で出掛ける事にした。Iも一緒に行つてくれる事になつた。八時十分幾々を出た。シャツ一枚で登つた。賽の積でもあまり寒くはなかつた。四方の景色を眺めながら後見坂へと急いだ。丁度坂を二つの黒點が動いてゐた。先きに出た二人のスキー登山者だつた。一人の學生が又一緒に行く事になつた。刈田の中腹からは風は寒くなつた。お釜の邊を又望遠鏡でのぞいた。お釜は漣がさざやいてゐた。十一時半刈田岳の頂に着いた。お社の窪みに入つて中食をとつた。雪の山の景色はいくら見ても飽きなかつた。先着の二人は清水の方へ下りて行つた。Iと東大の學生とはこゝで別れて幾々へ去つた。私達三人は又不安の大氣の中を目を光らせながら歩み續けた。

お釜側をNが中央をYがずつとはなれて左側を私が間隔をおいて熊野岳へと馬の脊を進んだ。三人は次第に遠ざかつて行つた。私は左へ左へと道をとつた。三角點へと一直線に登る積りではあつたが登りがくるしくなつたので更に同高線に沿つて左へ進んだ。Yのスキーの跡は私の下方からお社の方へと走つてゐた。私はこれを横過つて尙も歩を續けた。NもYも私の眼界を去つた。朝日の連山が前面遠く連り、吾妻山は左方遙かに凹凸してゐた。尙も歩みつゞけた前面に目をさえぎるものは何もなかつた。十米ばかり私の前方にむつくりとした雪の小塊が見えた。雪におほはれずにある部分はこの邊の岩石よりも色がうすかつた。外に何物も見えなかつた。足跡もスプールも見當らなかつた。もう少し近づいて見た。ボタンらしいものが光つた。リュックサックと私の心にひらめいた。呼子を吹き大聲でNとYを呼んだ。Nは直ぐ近くから來た。私の脊のリュックサックを叩いて見せた。風上にあるのでNの聲は聞えなかつた。意は通じなかつた。二人で近づいた。果してリュックサックだつた。Nには忘れられないSのリュックサックだつた。吹きつけた雪で四面がおほはれてゐた。紐が解けてゐる

た。口が開いて雪が入つてゐた。中を一寸見るとアザラシはたたんで入つてゐた。マツチ入りの罎が直ぐ側に外にころけてゐた。リックサツクは雪上にキチンと置いてあつて邊に入けがなかつた。西向きの斜面はずつと下の谷まで擴がつてゐた。問題の斷崖へもあまり遠くなかつた。時計は一時十分だつた。私は頂へ登つてYを呼んだ。Yはお社附近に行つてしまつてゐた。やがてYも來た。リックサツクを寫真に入れた。三人してこの斜面を下の谷まで下りながら捜すことにして下りやうとするとYが突然足下からあまり遠くない所を指してそこにあると言つた。私の頭はガンとした。やつぱり駄目だつたか、三人して近づいて見た。殆ど雪に覆はれて足部が僅かに露はれてゐた。スキーを穿いてゐた事、杖が側にあつた事、顔は上向になつて横たはつてゐた事などが判明した。リックサツクから十二米ばかり斜左下熊野岳三角點から西方六十米ばかり下の所と地圖で思はれた。最後の斷定が下された。一時二十分だつた。三人ではどうすることも出来なかつた。Yは足が一番達者だからと峨々へ急いで歸へつてもらつた。念の爲め現場の寫眞をとつた。リックサツクの側に私の兩杖の先に赤布をつけ

て樹てた。

どうして是點に倒れたのか頂上に近い吹雪の折には一番はけしからうと思はれる斜面に居やうとは誰も思はなかつた。吹きさらしの中に廿八日の夜から年も月も改まつたこの三日まで長い長い間、雪の山上にねむつてゐたのだ。Nと私は峨々々に急いだ。三時過ぎ着いて主人にこの旨を傳へた。昨日の吉報は虚報だつた。この上は一刻も早く天氣の變らぬ内に下山させなければならなかつた。青根と遠刈田へ應援の使をはしらした。電報は故郷藤澤と東京へ飛んだ。明日の天氣も大丈と思はれた。浴槽はいつもになく明るかつた。Iは已に遠刈田へ去つた後だつた。夜おそく青根からも遠刈田からも二十餘人の人夫衆が明日の手配をして上つて來た。私は宿の若者に杭を二本作つてもらつた。そして

三枝氏遭難之地 昭和二年一月三日

と書いた。仙臺を出るとき、まさか墓標が書き初めにならうとは思はなかつた。明日は誰かにこれを山上に持つて行くやうにたのんだ。

(未完)

\* \* \* \* \*

## 會務に就て

小川 玄 一

四季を通じて山だスキーだと言つてゐる内に又一年過ぎ  
終つて第七年目を迎へることになりました。

創立時代から今日迄での會の業績の變化は微妙で且複雑  
であります。而かも綜合して何の年をみましても健闘の跡  
の見えぬところがありませんか。年一年と私共には底に力  
強いのが築かれてゆく様な氣が致します。

一つの會が存續してゐる以上人と時との推移によつてい  
つなん時精神の沈滞、會計状態の行詰まり、仲間喧嘩と言  
ふ様なものに見舞はれ會の消滅を來すかも知れません。然  
し私共の會は未だ血が若いのです。血が沁んでは居りませ  
ん。會員お互の心と心との内に宿る不斷の熱と、力と、そ  
して理解とを以て力行して行つたならば會はまだまだ續く  
であります。

去る五月廿八日に私共の總會を開きまして第六年目事業  
報告、會計報告を致しました後で會の將來につき相談しま

したところ、新しく更生の山とスキー第七年目を繼續する  
事となりました。そして事務所は都合により舊事務所を引  
きはらつて札幌市北四條西十二丁目一番地に引越し、其處  
で會の事務萬端を處理することにし編輯を井出英次君に、  
會計の方を久々津庫二君にお願して私が會務一切を受け持  
つと言ふ様な具合にして事業を繼續する事になりました。

私共はもとより、微力ながら出來得るかぎり會の爲め働  
いてみたいと思つてゐます。美しく發達して來た山とスキー  
の會をして益々存在の意義あらしめ、その本來の大使命を  
遂行するには微力な私共だけでは到底不可能の事でありま  
して會員の一致協力に待たねばなりません。幸に會員並び  
に讀者諸兄の御後援と御指導とを切にお願するものであり  
ます。

雜報

全日本スキー聯盟臨時代表委員會

六月十二日東京丸ノ内日本クラブに於て開催、本日の會議を以て今年度代表委員會に代ふることとなれり。

出席者

稲田會長

黒崎、小川、廣田三常務委員

加入團體及代表者

樺太中央スキークラブ

北大スキー部

札幌スキークラブ

小樽スキークラブ

青森縣スキー聯盟

東北帝大スキー部

長岡スキークラブ

高田スキー團

稻門スキークラブ

早大スキー部

法政大學スキー部

新加入團體

沼尻スキークラブ

東山スキークラブ

明大スキー部

鶴見宣信

中川新

富永正信

長田誠

鈴木信三

同上

千葉毅

協議事項

本部提案

一、新加入團體承認の件

沼尻、東山、法友の三スキークラブは新に加入承認されたり。

二、諸報告

會計報告、年報に關する報告

三、聯盟役員改選

黒崎、小川、廣田三常任幹事重任

加納常任幹事の辭任あり。公選の結果札幌スキークラブ

員青山馨君當選せり。

松木喜之七

高橋次郎

吉岡龍太郎

村上敏郎

同 上

宮下利三

三谷益雄

四、競技及大會規定改正

(イ) 競技規定第五條中に新に左記事項挿入

デイスタンスレースニアツテハコースノ一ヶ所乃至適當ナル個所ニテ各選手ノタイムヲ計測シ後刻參考ノ爲發表スルモノトス

(ロ) 出發合圖ハ左ノ四段トス

一、拾秒

二、五秒

三、用意 (舊二秒)

四、銃聲又ハ記號 (舊銃聲)

(ハ) 標準飛型ノ附録トス

(ニ) 飛型審判ノ減點法

開行ヨリ四行目ニ次ノ事項挿入

(I) 但シ不倒ジャムブノ場合ハ最低ヲ一〇點トス

(II) サツツノ項

第二項第三項ヲ一文トシ次ノ如ク改正ス

二、踏ミ切りノ早過ギタルカ又ハ遲過ギタル場合ハ二點

以內ヲ減ズ。

(III) フライトノ項

第一項中ノ「者」ヲ「場合」ト修正ス

(IV) 「サツツ及ビフライト」ニ於ケル減點ハ一點乃至七

點ヲ限度トス」ノ「ヲ限度」ノ三字削除

大會規定中の改正

(I) 規定第三條第二項「第四位」ヲ「第六位」ト改正

(II) 新第六條トシテ次ノ一文挿入

出場選手ニシテ某團體ニ所屬スルモノハ該團體名ヲ以テ

終始スベキモノトス

(III) 舊第六條ヲ第七條トシ逐次一條下トス。

五、明年開催せらるべき國際オリムピックスキー競技

大會に對する聯盟の方針

會議當日北大、早大、法大より推薦ありし自費出場希望

選手を各推薦團體にて嚴選の上確定人數及姓名並びに參考

資料を添へて六月中に聯盟本部に通知し、聯盟本部にて詮

衡委員の協議の結果、最後の決定を與ふこととせり。

六、全日本學生スキー競技聯盟競技會は今後公認せら

るることとなれり。

寫眞說明

山とスキーの會新入會員

卷頭「オリムピヤシヤンツエ」は在獨木原均氏より贈ら

れたるものにして同シヤンツエは、新しきスキージャムピ

ングの理論として世界の注目を集めてゐる Strammann の

飛行力學の理論に基いて築造せられたるものである。この

シヤンツエにて同理論の計算の結果、優に七〇米突を越え

たる飛躍距離が算出せられたるが實際は飛躍姿勢其の他の

關係から理論通りの結果が得られなかつたとの話を聞いて

居る。

右訂正す

前七十二號會員名簿中會員大野精七を加へられたし。

前號(訂正)

小林辰雄、井田英次、久々津庫二

居る。

「トムラウシ山よりオブタテシケ山脈を望む」は昨年五

月の撮影にかゝり、美しき銀色の山膚がうららかな五月の

陽光の下に蜿々と連るのを見ては必ずや楽しい五月の山旅

を想ひ起さるることが出来るであらう。

寄贈圖書

山 み ち 六月號 山峰會

山 嶺 六月號 東京野步會

キヤムピング 六月號 ジャパンキャンブルクラブ

山 岳 六月號 近畿山岳會

(健)

## 移轉のお知らせ

今度私共の會の事務所を左の處に移轉致し六月二十六日より會務を取扱つて居ります何卒今後共多分の御後援と御指導を願申します

札幌市北四條西十二丁目一番地四十一號

山とスキーの會

昭和二年度各校夏季

登山計畫

第八高等學校山岳部

- 第一班 烏帽子槍縱走
  - 第二班 槍ヶ岳、穂高岳縱走
  - 第三班 針木越え立山劔岳方面
  - 第四班 燕より槍岳縱走
  - 第五班 白馬岳方面
  - 第六班 立山三山針木越
  - 第七班 劔岳生活
  - 第八班 槍岳生活
  - 第九班 槍澤生活
  - 第十班 上高地天幕生活
  - 第十一班 白根三山縱走
  - 第十二班 赤石岳方面
- 松本高等學校山岳部
- 第一班 燕・常念・槍ヶ岳縱走
  - 第二班 烏帽子・槍縱走
  - 第三班 笠・双六・樺澤・高瀬湯俣入り

第四班 後立山縱走

第五班 針木越え立山・劔・白馬岳

第六班 針木・薬師・槍・穂高縱走

第七班 木曾山脈縱走

第八班 東駒・アサヨ・地藏岳縱走

第九班 白根三山縱走

第十班 赤石山脈縱走

第十一班 團惠谷降下から北鎌屋根へ

第十二班 上高地キャンピング

第十三班 劔岳尾根縱走

松江高等學校山岳部

第一班 大山

第二班 隠岐一周

第三班 鳥根半島一周

第四班 鬼ノ舌震・船通山

第五班 瀬戸内海

第六班 大和アルプス

第七班 上高地キヤムピング及び槍・穂高縱走

第八班 富士五湖巡り

第九班 朝日連峰縱走

北海道帝國大學山岳部

第一班 芦別岳

第二班 ニベツツ山方面

第三班 日高山脈方面

第四班 三國山より石狩岳へ

第五班 穂高岳方面

第六班 芦別岳方面

第七班 熊根尻岳

第八班 夕張岳方面

第九班 オブタテシケ山脈縱走

第十班 槍穂高縱走

彼は鈍い滑走の時よりもより早く踏み切りを始めねばならない。

更にアプローチとシヤンツエとの境目に於てとる姿勢の時から踏み切りの時期に關係がある。若しもジャムバアが適當な前傾姿勢をとる爲に、自分の体を餘程前方に持つて行かねばならない時に、未だ屈身姿勢をとつて後方に餘程懸つて居たならば、普通の場合より餘程早く、踏み切りを始めねばならない。何となれば滑走から踏み切り姿勢中に体を前にかけて行くことは、直接踏み切りにしばしば移り行くものであるから。即ちアプローチでの滑走の姿勢即ち屈身姿勢から体を前方に持つて行くことは、本質的に已に踏み切りに屬して居るものである。夫れ故此に反して若しも已に大へん早くから非常に前かかつて來る人があるとすればそれ相當により遅く踏み切りを始ることが出来る。

是迄は吾々はたゞ踏み切りに對して關係ある体の前投出のことについて述べて來た。

此處で今兩脚の伸張について考へて見るならば、又踏み切りで性質が變つて來る。兩脚を一氣に伸すことは、凡べての最後の瞬間に従つて行くであらう。体を前方に投げ出すことによつて、よくしばしば兩脚が伸ばされる。而も之は飛躍を見て明かに判ることである。

兩脚の伸張は正しく早く始むることも出来る。然し乍ら兩膝での最後のカー杯の蹴りは、体を上方に突き出さしむるもので、この一蹴りは体が臺から離れるほんの短い間にせねばならない。兩脚のこの最後の伸張は、上体の最後の力強い伸張と結びついて居る。その伸張する時はと云ふと、スキ一の尖端がアプローチの傾斜面を過ぎて正にシヤンツエを滑走する丁度その時でなければいけない。そしてジャムバアは自分のスキ一が、シヤンツエの端を滑り出す時か、或は少くとも正にシヤンツエの端を離れんとする時にはもう、兩脚と上体とは伸ばされねばならない。その場合には兩脚と上体とは、一つの角度を作つて居るといふことは、根本的に於て已にさうゆう風に導れてあるのである。

踏み切りは早すぎても遅すぎてもいけない。(完)

#### 附 記

吾々の使用語	英語	獨逸語	諸威語
踏み切り又はサツツ	Leap	Absprung	Sats.
シヤンツエ又は飛躍臺	Take-off	Schanze	Hoppet.
過 程		Übergang	
前 提		Vordan	

本項及び先號記載の圖示の文に適當した繪として挿入圖を参照されたい。

踏み切りに於てもう一つ後方に兩腕を振り上げて飛ぶ踏み切り法がある。が之は宜しくない。多くの人はこの方法をとらないから今更此處で考へる必要もなからう。

更に踏み切りの前に兩腕を一度後方に引いて更に前方に振り上げる方法もあるが、此二つの動作は非常に速かに交互にされねばならない。

以上述べ來つた程度の踏み切り法は水平シャンツエの場合にまで應用することが出来るものである。然し此處に上向きのシャンツエと下向きのシャンツエとがある。下向きのシャンツエは、大規模のジャムピングヒルの設計に於て非常によく見るものである。是に反して上向きのジャムピングヒルは、短距離飛躍を目的とするに過ぎぬ練習用のジャムピングヒルに於て見らるるものである。

下向きのシャンツエでは、飛躍者はシャンツエの傾斜によつて、踏み切りの正しい姿勢を知る。そして水平シャンツエでとる姿勢よりもうんと前傾姿勢を深くとる。

それ故ジャムバアは、踏み切りそれ自身では、水平シャンツエの際の飛躍よりもそれほど強く体を前方に投げ出しては良くないであらう。然し乍ら反對に下向きシャンツエの滑走に於ては、その速度が制動さるることは少い。

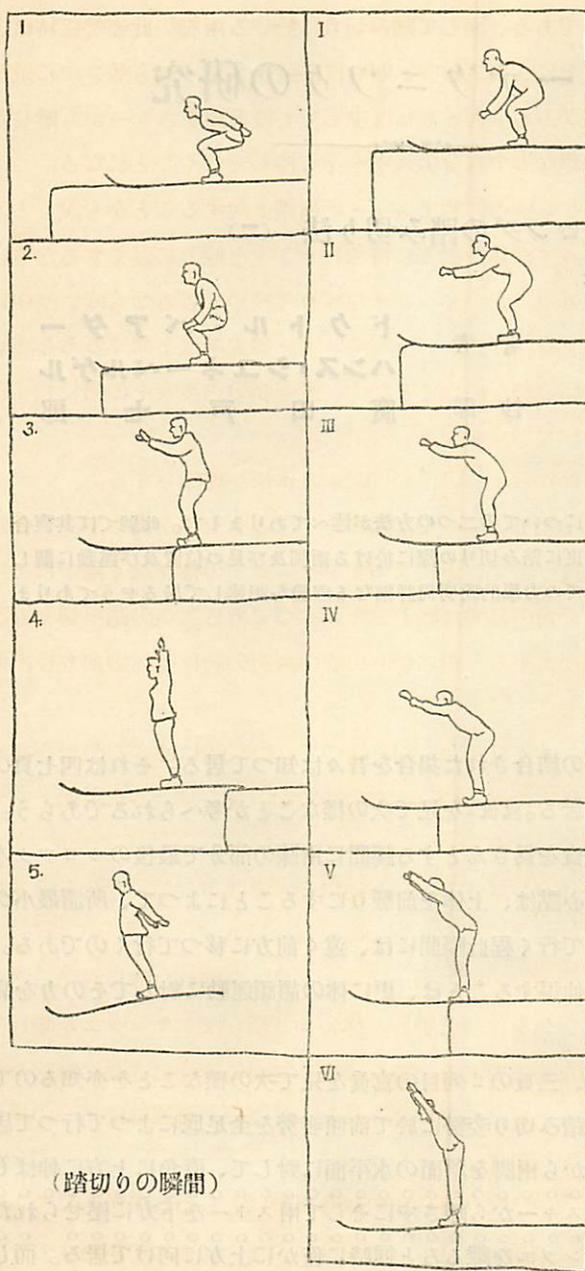
それ故踏み切りに對する前傾姿勢の完成は困難になる。その上ジャムバアはシャンツエの端に普通より速かに近づく。その爲に踏み切りの時期を逸し易い。それ故下向きのシャンツエでは普通より少しく早く踏み切るが良い。

上向きのシャンツエの場合に立返つて考へて見る。ジャムバアはシャンツエの上を滑走する時に後方に掛らねばならない。前方にグツと突き當るのをふせぐ爲に、此後方に体の残ることから体を適當に前傾として保つ爲に、ジャムバアは体を強く前方に出さねばならない。

最後に吾々は最も困難なる問題である踏み切りの瞬間について考へて見たいと思ふ。即ちジャムバアは如何なる瞬間にシャンツエから踏み切るべきか、或は又踏み切りを始むるべき時期が何時か。といふことを考へて見様。

是は先づ第一にアンラフに於ける滑走速度に關係があり、又滑走速度とエネルギーに關係がある。而してその速度と力とによつて一つの飛躍運動が完成される。若しも非常な速さでジャムバアがシャンツエの端に近づくものとせば、勿論





下肢と足とで一  
つの角を作ると云  
ふことは、前傾運  
動を有効に利用し  
て爲し得ること  
である。而して適  
當な角度を作ると  
云ふことは、常に  
吾々が希望し達  
せんとして居るも  
のである。而して  
此實際に當つて  
吾々はその様な  
ことをも知ること  
が出来ぬ

踏み切りの姿勢  
をとる時又踏み  
切りそれ自身の間  
でも靴の踵をスキ  
ーから離してはい  
けないし、而も靴  
の踵上で下方に  
押しつけ体を前  
方に投げ出し得  
る様に卒中其可  
能性をジャムバ  
アは保持する様  
につとむるので  
ある。

此可能性はジャ  
ムバアが足跡で  
立つことと同じ  
程度

# スキーテクニツクの研究

## スキージヤムピングの踏み切り法 (二)

著者 ドクトル・バアター  
ハンス・シュネーベルゲル  
抄譯 廣田戸七郎

前號には踏み切り方法についての二つの方法が述べてありました。此號では其複合とも見るべき方法を述べ更に踏み切りの際に於ける兩脚及び足の位置及び運動に關し更に踏み切り方法に關しての力學的説明尙詳細なる理論を記述して居るやうであります。

例として此二つの方法の結合された場合を吾々は知つて居る。それは四七頁の12行目の寫眞で示されて居る。寫眞2を見て次の様なことが考へられるであらう。

即ち大腿部が兩脚の伸直を爲さんとする瞬間に兩膝の部分で最後のショックを保ち、そして實際体の重心點は、上体を前懸りにすることによつて、所謂最小の韻頭運動を前上方に進めて行く程此瞬間には、遠く前方に移つて行くのである。此處に於て上体を精一杯伸張することは、更に体の韻頭運動に對してその力を高むるものである。

吾々はこれとそして四、三頁の2列目の寫眞を見て次の様なことを亦知るのである。即ちジヤムプアは踏み切り姿勢に於て前傾姿勢を全足底によつて行つて居るにも關らず、しかも踵から兩脚を斜面の水平面に對して、直角に上方に伸ばして居る。即ち靴の踵は兩スキーから離さずにして兩スキーを下方に壓せられたる靴の踵によつて、シャンツエを離ると同時に僅かに上方に向けて居る。而してスキーのテールは斜面を離ると共に下方に下つて來るであらう。

# 「山とスキー」バツクナンバー

唯今左の號數の殘本を所持して居ります。御希望の方には喜んでお頒ちします。

## 第一年目

一號—十三號 絶 版  
十四號—十五號 僅 少

## 第二年目

十六號—十七號 絶 版  
十八號—二十六號 僅 少

## 第三年目

二十七號—三十號 僅 少  
三十一號—三十四號 絶 版  
三十六號 僅 少  
三十七號 絶 版

## 第四年目

三十八號—四十九號 僅 少

## 第五年目

五十號 絶 極 少

五十一號—五十三號 僅 少

五十四號 絶 版

五十五號 僅 少

五十六號 絶 版

五十七號—六十號 僅 少

## 第六年目

六十一號—六十五號 僅 少

六十六號 絶 極 少

六十七號 以下僅少なからあります。

右の内二十六號及び五十號は倍大號につき定價金六十錢、他は何れも一部金三十錢であります。

昭和二年四月調

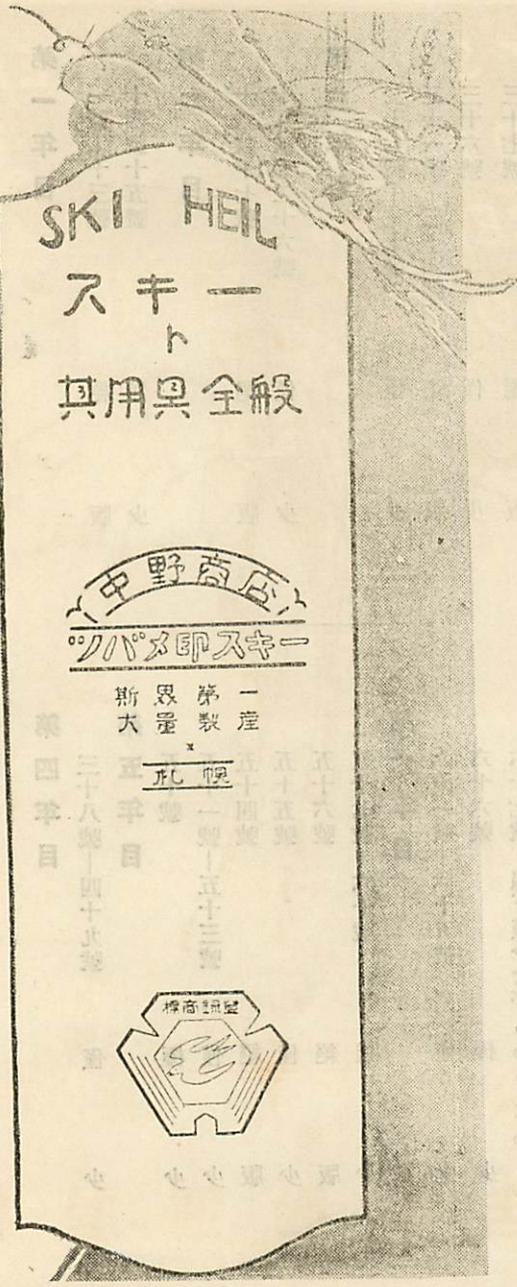
山とスキーの會

自信ある本年度製作品

山とスキーの會

新全式の製造の製本を改良して得られます。噴霧器の式にお喜ぶ可き願ひします。

「山とスキー」ハヤセセキ



SKI HEIL  
 スキート  
 其用具全般

甲野商店

スキー印ハヤ

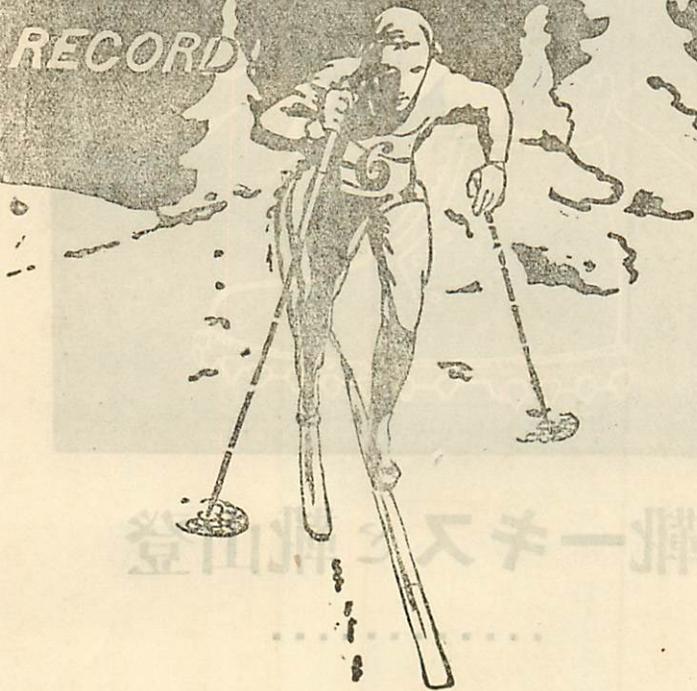
第一号	第一号	第一号	第一号
五十六號	五十五號	五十四號	五十三號
五十二號	五十一號	五十號	四十九號
四十八號	四十七號	四十六號	四十五號
四十二號	四十一號	四十號	三十九號
三十八號	三十七號	三十六號	三十五號
三十二號	三十一號	三十號	二十九號
二十四號	二十三號	二十二號	二十一號
十八號	十七號	十六號	十五號
十二號	十一號	十號	九號
六號	五號	四號	三號
第一號	第一號	第一號	第一號

標商註冊



山とスキーの會

GET SUPERFINE SKEES.  
AND MAKE AN  
EXCELLENT  
RECORD!

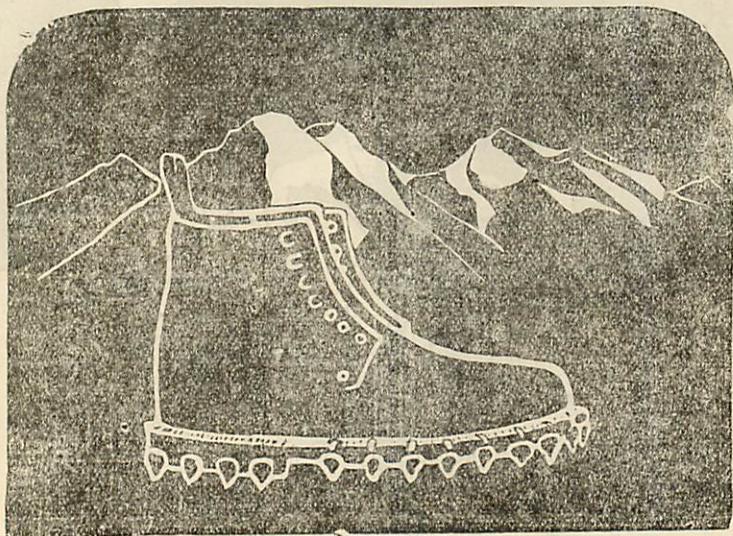


東京市本郷區四丁目  
具用其ト一キスルナ秀優

樽 小  
店 具 動 運 屋 梅

テ於ニ會覽博藝工産畜回二第

領受牌金賞等一



# 靴一キスと靴山登

角目丁四區郷本市京東

## 店靴屋田太

番二一七四小話電

番七二一六京東替振

◆山とスキーの會は北海道帝國大學文武會スキー部の有志が、此の雜誌を發行する爲に作つてゐる會です。

◆スキーを研究せられる人、登山に興味を持たれる方が一人でも多くお読み下さることを願ひいたします。

◆山岳及びスキーに關して何なりとも御寄稿下されることを願ひます又印畫の御惠送を切望致します。原稿紙は御申越次第お送り致します。

◆原稿は、。を一字とし、行を更めるときは一字下けること。

◆記事中の數量は全て、C・G・S・系によられん事を望みます。

◆雜誌代金に就て一應下記の諸項を御承知下さい。

◆本會より發する電信略號を「ヤマ」として居ります。

◆前金切れの時の御知らせは最後の分の包装中に同封して御送りします。次の御送金あるまでは配本を見合せます。

### 定 價 金參拾錢

\*前金御申込が、現金でなければお渡しいたしません。

\*御送金はなるべく振替にてお願致します。

\*六冊分前金拂込の方には送料を頂きません

\*前金の切れた時の御知らせは最後の分の包装中に同封して御送りします。次の御送金

あるまで配本を見合せます。

\*本誌は營利的の刊行物ではありません。紹介、縁故の有無にかゝらず雑誌の代價は頂きます。

昭和二年六月廿八日印刷

昭和二年七月一日發行

(毎月一回一日發行)

編輯者 山 口 健 兒

印刷兼 發行者 廣 田 戶 七 郎

北海道札幌市北一條西二丁目

印刷所 札幌印刷株式會社

北海道札幌市北四條西二十二丁目一番地

發行所 **山とスキーの會**

振替口座水樽八四九五番

La Gazeto  
de la  
Monta kaj Skia Klubo  
No. 73. Julio 1927. Sapporo. Japanujo.

全  
回  
記

Mimatsu Special Sporting Goods  
for  
Everything in Summer and Winter-Sports.

美 滿 津 特 製

夏と冬の各種スポーツ用具!



■ 型録「春より夏へ」進呈 ■

HONGO, TOKYO, JAPAN.  
MIMATSU & COMPANY, INC.

合 名 會 社  
美 滿 津 商 店

東 京、本 郷、赤 門 前

大正十二年七月二十七日第三種郵便物認可  
昭和二年六月廿八日印刷  
昭和二年七月一日發行

山とスキー

第七十三號

定價金參拾錢